

知覚相対主義の批判

——「知覚の哲学」試論 その五——

種村 完司

(1990年10月12日受理)

Kritik des Relativismus der Wahrnehmung

——Versuch über “die Philosophie der Wahrnehmung” V——

Kanji TANEMURA

I. 知覚にたいする信と不信

1) われわれは、日常生活の中で、じつにしばしば見まちがえたり、聞きちがえたりしている。「見まちがい」「聞きちがい」といっても、「見え」「聞え」という知覚的事実そのものが誤っているというよりは、いわば不明瞭な知覚を通して、対象（の形状・性質その他）について誤って判断したのだ、ということを前論で明らかにした。しかし、判断と直結しているような知覚の場合、その知覚をつうじておこなわれる、対象についての誤った判断は、誤った知覚的判断、ひいては誤った知覚と同等であるとも述べた。このかぎりでは、われわれはやはり、いわゆる対象的判断の誤りに導きやすい、あいまいな知覚や誤った知覚が存在することを承認せざるをえない。

こうしたことが、いうまでもなく哲学史上、感覚・知覚は、われわれをしばしば欺くもの、十分な信頼のおけないもの、さらに哲学の確実な基礎たりえないもの、という評価の源泉となってきた。だが、人間の対象認識は、感覚・知覚にとどまるものではないにせよ、感覚・知覚なしには成立しえないし、開始もできない。ヘーゲルのように、感覚・知覚の可変性、一時性、誤りやすさ等を強調することによって、認識をもっぱら知性による感性的諸素材・諸契機の止揚（むしろ廃棄）¹⁾の過程ととらえることは、知性信仰にもとづく節度のない思弁主義を招来するだけであろう。その過ちをおかさなためにも、われわれは、あらためて、感性的知覚がそもそもどれほど信頼されうるものか、逆にどの点からは信頼してはならないか、つまり知覚にたいする信と不信の境界ともいべきものを確定しなければならない。

1) ヘーゲルのいう「止揚」は、よく知られている通り、「廃棄」と「保存」という矛盾する両概念をふくんでいる。しかし、フォイエルバッハがヘーゲルによる感性軽視を批判したように、知性による感性的なもの止揚過程には、後者の「保存」的性格が十分に貫かれてはいなかった。

その点で、感覚・知覚にたいしてとったデカルトの態度は、適切な知覚評価をめざす上で、一つの参考になるように思われる。哲学の確実な第一原理をうちたてる途上で、デカルトのおこなう方法的懷疑は、臆見や先入見、事象における不確かなもの・誤りやすいものを、次々に排除した。この次元では、感覚・知覚は、疑わしいという評価を免れないものとして、批判と排除の対象でしかなかったことはいうまでもない。だが、日常的な対象認識のレベルでは、彼は、感性的知覚がもつ一定の確実性および知覚を信頼すべき根拠を、強調することも忘れなかった。物体の本質については、感性的知覚による認識は、なるほどきわめて不十分だが、「身体の保全に関する事がら」については、それは虚偽よりも真実を多く示してくれるし、他の多くの感覚、記憶や悟性などをいっしょに用いることによって、吟味を重ねながら正しい対象知覚をすすめることができる、ということ述べた（『省察』）。

方法的懷疑によっていっさいの感覚・知覚とその成果を排除したこと（さらには、哲学原理の探究と日常的な対象認識とを切断したこと）が、正しいことかどうかは疑問だが、合理論者デカルトにおいても、知覚への信頼（条件づきの）があったことは注目されてよい。「感覚から得てくると思われるものは、何もかも軽々しく容認すべきではないことはもちろんであるが、しかしまた、そのすべてに疑いをかけるべきでもない」（『省察』）という彼の主張は、ある意味できわめて常識的ではある。しかし、それは、イギリス経験論や現代現象主義派による知覚信仰と、それと対極的なドイツ観念論の知覚不信のいずれにも与せず、さらに両者の積極面を摂取できる足場を、われわれに提供してくれていることもまちがいない。

2) さて、ここで、知覚への不信や懷疑をひきおこす原因になってきた、そして現になっている、種々の知覚の誤りやすさについて、いくつかの例をひきながら吟味してみよう。

「知覚の誤り」とはといっても、きわめて単純なものから、かなり複雑なもの・いわば高次なものにいたるまで、いろいろな種類、いろいろな段階がある。

たとえば、遠くからは円柱状に見える四角の建物、生きた人間だと見えるマネキン人形、赤ん坊の泣き声のようにきこえた猫の声など、これらの視覚や聴覚の誤りは、日常生活の中でも単純な見まちがい・聞きちがいの部類に属する。これらの誤りを訂正するのに、それほど苦労はいらない。事物により近づいたり、その周りを回って、あらためて見つめてみる、あるいは注意力をはたらかせて、一度といわずくり返し、見なおしたり聞きなおしたりする、必要とあれば手でさわったり、叩いたりしてみる、等々。こうした再吟味の行為および他の諸知覚の動員によって、最初の誤りの大部分は訂正されうるだろう。

つぎに、他の諸知覚の助けだけでなく、一定の表象（またはイメージ）や記憶の力によって訂正されうる知覚の誤りも多く存在している。たとえば、たまたま知人に出会ったとき、若いはずの彼が、疲労の表情や服装のせいで老人のように見える場合、以前食べたことのあるカニをエビの味と誤る場合、聴いたことのあるメロディーを別のメロディーととり違える場合など。

これらの諸例も、ごくありふれた日常的知覚の誤りにはちがいない。じっさい、先の例と同じように、いくどか見なおしたり味わいなおしたり聴きなおしたりすることによって、その多くは訂正されよう。しかし、ここでは、知覚のくり返しだけでなく、感性的表象を再生したり、記憶を想起することによってはじめて、誤りに気づき、それを訂正し、正確な知覚的事実に達することも少なくない。過去経験（人間や事物についての、色・音・味についての）が、表象としてまたは記憶像として観念的に蓄積されているからこそ、必要なときに呼び出され、知覚にもとづく対象的判断の誤り訂正の作業に参加してくれるわけだ。

以上のほかに、単純な誤りとはいえぬ、したがって諸知覚の再動員や知性の助力によってもなかなか訂正することが難しい、やや複雑な「誤った知覚」の例もあることに注意しておこう。その代表的なものは、なんといっても、これまで知覚心理学がさまざまな観察と実験の労苦をへて明らかにしてきた「錯覚」の事実である。

視覚の領域では、フレーザー図形に代表される「角度・方向錯視」、ヘリング図形が示す「湾曲錯視」、有名なミュラー・リヤー図形に代表される「大きさの錯視」、ジャストロー図形やポンゾ図形が示す「対比錯視」などの幾何学的錯視現象にはじまり、「あいまい図形や逆理図形による錯視」、仮現運動に代表されるように、静止しているものが動いて見えたり、また逆に動いているものが静止して見えたりする「運動の錯覚」、地平線に近いときの月や太陽は天空にあるときより大きく見えるという「月の錯視」等々、じつに多数にのぼっている。さらに触覚の領域では、交差させた人さし指と中指の間にはさんだ細い棒が二本に感じられる、という「アリストテレスの錯覚」や、同じ重さでありながら、体積の大きいものが小さいものより重く感じられる「運動感覚上の錯覚」¹⁾ などがある。

これら錯覚は、けっして異常な知覚ではないのだが、より高い注意力やなんらかの継続的な知的努力をもってしても、容易に消すことのできない知覚現象なのである。すなわち、人間は、その状況下でどうしてもそう見てしまう、あるいはそれ以外には感じられようがないのであり、その意味で、人間の知覚能力や身体感覚に固有の、いわば内在的な特質の発現にほかならない。

もちろん、錯覚は無条件でおきるわけではない。それは、錯覚をおこしやすい特定の条件にかならず伴われている。もし知覚対象が、変化なき均一的な空間や時間の中におかれているものであれば、あるいは多様な等質的な対象的世界にとり囲まれているのであれば、錯覚はそもそも存立不可能であろう。錯覚が発生するということは、じつは知覚対象が固有の背景をもっているということ、換言すれば、多様な、ときには錯綜した関係の中におかれているということの意味している。しかもその背景は、密度の差や歪み・ねじれ・色彩や明度の違いをもっている、つまりけっして平板で等質的ではない、ということだ。

この複雑な錯覚現象、とくにさまざまな錯視の事実を統一的に説明することはひじょうに難しい。

1) 自動車を運転した者ならよく経験することだが、高速自動車道路での高速度運転に慣れたドライバーは、一般道路に出たとたん、いつもより速いスピードを出しているにもかかわらず、ひどく遅いスピードで走っているとしか感じられない。この例なども、急激な速度変化にもとづく、身体感覚上の錯覚と呼んでよい。

あるゲシュタルト心理学者は、過去経験による説明をしりぞけて、錯視現象を恒常性現象とともに、「場の体制化」の表現だとみなしている（P・ギョーム『ゲシュタルト心理学』）。また、ある論者は、ポンゾ型錯視では、不等な背景におかれた二つの同等の近接刺激が、不等な遠隔対象として知覚され、大きさの恒常性では、不等な背景におかれた二つの不等な近接刺激が、同等な対象として知覚されることを指摘し、錯覚と恒常性の現象は、一般に同じ事態の二側面だと論じている（木曾好能「知覚的世界」、『科学の哲学』所収）。

しかし、幾何学的錯視といえども、きわめて多種多様な原因によって規定されており、ゲシュタルト心理学のいう「体制化」理論だけでは説明されえないと思われる（「体制化」は主要な、だが一つの原因であろう）。また、錯視と恒常性とは、一定の場合に密接な対応関係にあるとしても（遠近法的観点から、ポンゾ型錯視やミュラー・リヤー錯視と、大きさの恒常性とは、一種の相関関係にあることが説明されうる）、これ以外の錯視と恒常性現象とがすべて厳密に対応しうる、ないしは同じ事態の二面だ、とは断言できない¹⁾（そう断言するには、実証的事例があまりに不足している）。

それはともかく、他の知覚によっても、記憶や知性によってもたやすく消しえない錯覚ではあるが、この錯覚のおこりうる条件を知り、その錯覚の特性をあらかじめ理解しておくことは、それを完全に正すことはできなくとも、それによって行動を大きく妨げられたり、危険な状況下に直面せざるをえなくなることを、少なくとも軽減してはくれるだろう。とくに、行為主体がこの錯覚現象のただ中にあるとき、錯覚している身体を反省的な知性によってたえず部分的に修正し、補完し、方向づけようとすることは、合目的的行為の達成にとって欠かすことができない（前ページ注¹⁾の自動車の運転の例を想起せよ）。錯覚そのものの解消や直接的な是正は、たしかにほとんど不可能ではある。だが、われわれは、人間的諸能力を動員し巧みに活用することによって、錯覚をいわば間接的に訂正する、ということはできるのである。

3) つぎに、それ自身誤った知覚というのではないが、誤った判断をひきおこしやすい知覚の例をとりあげて検討してみよう。先にとりあげた、半分水中にある棒が折れて見える、という知覚はその代表的なものだ。それ以外に、デカルト以降よく引き合いに出されてきた、ある物体が白く見える、あるいは熱く感じられる（だから物体の中に白いものがある、あるいは熱いものがある、と判断してしまいやすい）とか、遠くにある物体は小さく見える（だからその物体は目に見える通りの大きさや形である、という判断をくだしやすい）という知覚（それに結びついた判断）などがそれに当たる。

どんな感性的知覚でも、ある条件下での知覚する主体と知覚される対象との交流の結果であり、関係の表現である。だから、感覚・知覚の事実をただちに事物の性状そのもの・本性そのもの（それは知覚の一つの構成要件である）だけに帰属させることは、独断的な誤謬にほかならない。これ

1) この点で、私は木曾論文には部分的に異議があるが、しかし、この論文が主題的に展開している知覚の直接性や確実性についての基本主張には、全面的に賛成である。

がまた、いわゆる素朴実在論のおかしき過ちでもあった。

「白さ」といい「熱さ」といい、ある生理的状态のもとに、対象を白いと見たり、熱く感じたりする主体がなければならず、そして、色や寒熱の物質的条件である光や大気やエネルギーがなければならぬ。だから、色や熱さの知覚も、対象の本来的な性状だけで一義的に決定されるものではない。物体の大きさや形の知覚は、「第一性質」の名のもとにロックが考える通り、事物自体の性状を、いわゆる第二性質よりは比較的存在のままに表示するとはいえ、物体自身がさまざまな空間的配置の中におかれうるものであり、それゆえ知覚主体にたいしても変化に富んだ距離・奥行関係を取りうるのである。それゆえ、物体の大きさや形の「見え」は、じっさいの大きさや形と区別されねばならない。「見え」を「対象自体」と同一視するところに、素朴実在論的誤謬が成立するのだが、もし知覚を成り立たせるさまざまな条件を無視したり忘れたりすると、われわれ自身もただちに素朴実在論に類する主観的判断におちこむことになるだろう。

これと同じことは、いわゆる「仮象」（正確には、カントのいう先験的仮象ではなく経験的仮象）についてもいえる。カント自身は、「感官あるいは一般に主観にたいする関係によってのみ対象に属するにすぎないものを客観自体に付加する」ことを仮象と呼び、仮象の例として、バラそのものに赤色を、土星に柄を、あらゆる外界の対象に拡りそのものを付加する場合等をあげている（『純粹理性批判』）。カントの「仮象」規定を受けいれれば、前述した素朴実在論的な対象認識も、この仮象の範囲に当然ふくめてよいことになるだろう。

われわれは、このほかに、人間の身体の領域での仮象として、事故で腕か脚を失った人が、今ももう存在しないその四肢の一部のある箇所、以前と同じような痛みを感じるといふ「幻影肢」現象、天文の領域での仮象として、太陽が東から昇り西に沈み、夜空の星も東から西へ回転しているように見える、という天体運動の知覚をつうじて、天空が地球を中心にして回っていると誤解した「天動説」、さらに、社会事象の分野での仮象として、マルクスが明らかにしたように、価値創造の主体は労働する人間であるのに、商品生産のもとでは、人間の社会的労働の産物である商品・貨幣・資本が、それ自体で固有の価値をもち人間から独立しているかのように現象する「商品の物神性」、等々を代表的なものとしてあげることができる。

これらの事象はそれぞれ、それ相当の独自の生理的・心理的・自然的・物理的・社会的・文化的条件、あるいはそれら諸条件の複合に支えられて発生しており、それだけに知覚的レベルだけでは容易に克服しがたい、十分な存在理由をもった仮象である。これらの事実の発生根拠は、知覚をよく洞察するところではない。知性による長い探究とすぐれた発見をまたねばならない。さまざまな自然科学や社会科学による研究とその成果は、先の素朴実在論的知識や多くの仮象を成立させる原因や条件を実証的に明らかにし、ひるがえってそれらの発生・必然性を理論的に説明してきた。もちろん、このことによって仮象それ自身が消え去るわけではない。だが、仮象にまどわされずに、より包括的なより巨視的な立場から、自然認識や社会認識をすすめることは可能となる。

要するに、多くの人々をしばしば思いこみや偏見に誘う、仮象などの知覚的事実も、相対的に正

しく現実の事象を反映している別種の知覚や、錯綜した諸現象から恒常的なもの・法則的なものを取りだそうとつとめる知性によって、やはり間接的に訂正されうるのだ、といってよい。厳密に言えば、知覚そのものが直接的に変更させられるわけではないが、知覚から独断的な思いこみや素朴実在論的な偏見へいたる道が阻止されるのである。

人間の知覚が、多くの場合、それ自身錯覚であったり、実在しないものを確信させたり、仮象に導いたりするという理由で、全面的にとはいわないまでも基本的には信頼できない、と主張するのは、当の知覚の不十分さや限界を、他の多くの知覚や思考する知性によって気づかせ、しかもそれを漸次的かつ継続的に克服していくことができる、ということを見ないからである。知覚的事実にはたしかに慎重でなければならない。しかし、それは、知覚への不信とは根本的に異なるのである。

II. 知覚的認識の発展

1) 前後左右、そして上下のさまざまな方向と角度から見られた特定の事物のさまざまな側面、いろいろな時と所で状況に応じて変化する人間のいろいろな表情、そのどれをとっても、一つひとつがまぎれもない事実、たしかな知覚的事実である。上面から見れば長方形である机は、横の斜め上から見れば菱形になったり、正面の斜め上からは台形に見えたりするが、知覚的事実という点で、長方形は菱形や台形より優越しているわけではない。明証的な「事実」として同格であり、等価値である。ある人間が、苦勞の多い仕事をやっとなしとげたときに見せる安堵と喜びの表情、愛する肉親の不慮の死に直面したときの絶望的な悲しみと苦痛の表情、親しい人と歓談しながら時おり見せる快活で茶目っ気にあふれた表情など、そのどれもが当の人間自身の性格・気質・感情の現われであり、ある表情だけが他の表情よりいっそう真実だ、というわけではない。ここでも、種々の表情の間になんらかの格差や序列をもちこむことはできない。

以上のことは、だれも否定しえぬほど明白なことのようと思われる。だが、このことをもって、すべての知覚的事実は、どんな条件下でも、その真実性において上下・優劣はない、つまり同格である、と結論づけることが許されるだろうか。じっさい、知覚相対主義に立つ論者は、先の諸例から、机についての「見え」すべてを等価値とした上で、机は長方形であるか、菱形であるか、台形であるか、そのいずれか一つに決定することはできない、という。また、人間の表情についてもすべてが真実であって、どの表情が他の表情より当人の人柄をもっとよく示す表情であるかは決定しえぬ、と断言する。¹⁾ だが、これは、あきらかに飛躍である。議論の本位、対象認識の視点を度外視した独断にほかならない、と私は考える。

ごく常識的に考えれば、一般にひとは、上面から長方形に見える机が、斜め上からは菱形や台形に見えようと、「その机のほんとうの形は長方形だ」と断定するだろうし、机の形は決定できぬと

1) 人間の表情をめぐるこの議論については、大森莊蔵著『流れとよどみ』中の「真実の百面相」を参照。

